

夏が来ると思い出す K 君と形見

令和 2 年 9 月

私には人様にいえる程の趣味はない。残念に思っている。ただ暇な時、本を読んで過ごすのが趣味と言え趣味である。一冊ワンコインで一週間楽しめゴルフや競馬などと比較にならないほど安上がりで貧乏人の小生には都合の良い趣味だと自画自賛している。

年齢とともに読書の興味は変わり最近では直木賞作家車谷長吉の私小説を読んでいる。なぜ暗い雰囲気「車谷の本」といぶかる向きもあろうが素直で謙虚な生き様に魅力を感じる。

具体的な理由は 3 つある。

- 1 つは、戦後没落不在地主の境遇はわが身と酷似し、ほぼ時代背景を共有して生き抜いた。
- 1 つは、大学卒業後暫くして会社に、社会になじまめず世捨て人として約 20 年間社会のどん底で生きた体験を基に私小説を書いた。人間の本質を見せてくれる。
- 1 つは、直木賞受賞作「赤目四十八瀧心中未遂」の小説に登場する場所が小生の勤務した姫路とその周辺にあり懐かしい地名を身近に感じる等々である。

遅くして世に出た彼は寡作で彼の作品を全て読んだ。特に赤目四十八瀧心中未遂は印象に残る。最近読んだ小説「銭金（ゼニカネ）について」の中に書かれている話の一部に小生が若い時体験した事に少し似ていて共感を覚えた。その本の一部は次のように以下の記述（赤字部分）がる。少し長いがその一部を引用する。

（作者の）学生時代の末に、ある友達から泣きつかれ、私の信用である人からある程度まとまった額の金を借り、友達の学費滞納その他を肩代わりしたことがある。無論、その男にせっ付かれたからであるが、併しその男も卒業後の就職先もすでに決まっており、いずれ月々の給料から返してくれるという「はなし」であった。が、その男は卒業後、その就職先をすっぽかし、どろんしてしまった。となると、困るのは私である。予想だにしないことであった。

どろんする直前に突然電話が入り、「お前が勝手にした借金だからな。俺は知らねえよ。あはは。頓馬めッ。」という挨拶であった。（途中省略）私は卒業後、東京日本橋の某広告代理店に勤め、月々に給料・ボーナス等から工面して借りた金を返して行った。何しろ学校を出立ての薄給である。この尻拭いに 2 年半を要した。

今から 55 年以上前、小生は大学校の 2 年生であった。たまたま気が合った K 君とは専攻も訓練班も同じで苦楽を共にした。彼はカメラに興味が高く、あるときキャノンの最新機種が欲しい。ついては割賦で給料天引きで買うので保証人になってくれといわれ軽い気持ちで同意した。

契約が済んで直ぐに、家庭の事情で買えなくなった。何とか君が買ってくれとなりやむを得ず引き受けた。当時学生手当の 12～13 カ月分（当時月 4 千円程度であった）に相当する大金を支払うことになった。その後カメラを楽しんだのは僅かで、そのうち物置に仕舞ってままた 55 年経った。いまだ捨てきらずに我が家にある。時々見て往時を思い出している。大学校を卒業して共に自衛官に任官した。任地は遠く離れ数年後のある日彼の訃報の噂が流れた。柔道で鍛えた筋肉隆々の偉丈夫な彼の訃報は信じられなかった。後に聞けばその夏海水浴に行き偶然幼女がおぼれる事態に遭遇し、わが身を顧みず飛び込み人命救助しわが身を犠牲に帰らぬ人になったという。自衛官の本領を発揮し我が命を犠牲に人命救助した彼はナイスガイであった。

勿論恨みなど微塵もない。懐かしさだけがこみ上げてくる。時も彼も偉大である。

合掌